

野を走るひと——『笑う海』(木原実)に寄せて

市ヶ谷に冬の朝は明けきらない 縄打たれた坐棺束をむいて並ぶとき
 小興安嶺の湿地の底から天皇を呼ぶ声が 一声二声 鶴となって飛びたつ
 罽星みだれとんで 皇統の世が移る 暖冬を僅かに生きている
 野戦の賑わいの中で別れた馬 貨車の窓から雪をみていた
 石畳にそって花を植えるヒットラーの支持者にこやかに老いている
 天皇神となる日は東京にいて死語のつぶてを浴びていよう
 象徴不信の声もなく早鐘を打つように戦後が終る
 偽満州国という野に戦い炎天にまっ赤な鶏頭が伸びてゆく

全篇を貫く反戦・反天皇の姿勢に圧倒される思いだった。一九八九年、『天皇詩集』(安西均はか天皇詩集編集

委員会、オリジン出版センター、一九八九年四月)と題するアンソロジーを本屋で見出した。元号がまだ変わら
 ない頃より準備に入り、「昭和という一時代と、この時代に影を落していた天皇と天皇制を、詩という文学形式
 を通して振り返り、検証する目的」で編集された『反天皇』詩集であった(「はしがき」)。八八篇のなかに、木
 原氏の「菌圃のとき」という詩も収録されていた(氏の詩人として仕事は『木原実全詩集』オリジン出版セン
 ター、一九八六年八月、に集大成されている)。「天皇詩集」に並ぶ『天皇歌集』の刊行は、まず望めないだろ
 うと、当時の私は思ったものである。私は、読んだ歌集や目を通した歌誌から「反天皇」短歌を見つけてはメ
 モしたりしていたが、数は少なく、むなしさが先に立ち、そんな作業も中断して時を縫った。そして、出会った
 のが『笑う海』であった。これこそ、「反天皇歌集」ではないかと目を見張ったのである。

なんどか終りをみてきた汽車の旅 東京に連立政権が生まれる冷夏
 野合ではないよといって転った線香花火の火の玉を拾いにゆく
 鮮明な旗をあげよ 暗緑色の闇に揺れている夏コスモス

一九九五年五月二七日、日本社会党は、臨時党大会を開き、展望のないまま、新党移行方針を決定した。連
 立政権という事実も先行し、自衛隊合憲、安保条約堅持はか、いくつかの政策転換を承認する宣言も出された。
 社会党は、政党への公費助成を受けんがためのみの党に姿貌しつつあると言ってもいいだろう。ある人名録に
 よれば、木原さんは、一九六七〜八〇年のあいだ、社会党、千葉一区選出の衆議院議員をつとめたとある。農
 民組合を根拠地とした活動や党本部の要職を経てのことである。「政治家」のイメージからは、信じがたいほ